

対人関係の親密さにおける自己システムの機能

The Function of Self-system in Close Relationships

磯崎 三喜年 ISOZAKI, Mikitoshi

● 国際基督教大学
International Christian University



対人関係, 親密さ, 自己, 自己評価維持, 関係性の維持

Interpersonal Relations, Intimacy, Self,
Self-evaluation Maintenance, Relationships Maintenance

ABSTRACT

Human self arises from social interaction with others and plays an important role in the influencing how people attain and maintain interpersonal relations. The purpose of this paper is to provide an overview of the representative theories of dynamic self and to discuss the function of self-system in interpersonal intimacy. People strive for both self-evaluation maintenance and close other's self-evaluation maintenance. The psychological mechanism striving for close other's self-evaluation maintenance is called relationships maintenance. Understanding of the self-system leads to maintenance and improvement of relationships with other people.

1. はじめに

対人関係、二者間の親密さについては、Heider (1958) のバランス理論をはじめとしてさまざまな理論やモデルが提出されている。また、そうした研究に関しては、物理的な近さや類似性、好意の返報性などの対人魅力の規定因を検討したもの、好意と恋愛の異同の問題（例えば松井, 1993）を扱ったものがある。さらには、二者間の関係の形成と維持・発展、そして崩壊にいたる一連の親密化過程に関する研究（例えばMurstein, 1977）もある。その一方で、服装や化粧、顔などの外見から魅力を論じたものもある（例えば大坊, 1997; 小野寺, 1989）。

魅力は、自己の社会的価値と密接に結びついており、その意味で個人の適応や社会行動と密接なつながりをもっている。化粧や装うことによって、精神的な病を持つ老人の病状が改善したとする報告（浜・浅井, 1993）もある。これは、自己を好ましく捉えること、また、他者に自己を好ましく呈示することの双方が関わっている。自己と関わる他者の存在があってこそ、自己の好ましさが顕現化する。対人関係の親密さや関係の維持・発展といった問題は、関わりあう二者が互いに自己をどう捉え、その関係において自己の社会的価値を感じ取ることができるかどうかという視点から捉えることができる。

ところで、現代社会においては、これまで以上に人間相互の関係づくりが大きな課題となっている。産業化、情報化の進展によって、携帯電話や電子メールの普及といった生活上の利便性が上昇する一方、少子化や核家族化などに伴って、対人間の直接的・対面的な接触は減少しつつある。それだけ生き生きとした感情を共有し、生身の人間としてぶつかり合うことが少なくなっている。干渉を排した「居心地のよい」個別化とはうらはらに、感情的なつながりに欠ける生活が現出している。対人関係の親密さを問題にするには、従来の対人魅力の視点に加え、二者間の関係のあり方そのものを問うことが欠かせないように思われる。

対人関係の親密さを、二者間の関係のあり方という視点から捉え直すことは、とりもなおさず関わりあう個々の自己そのものを問題にすることでもあ

る。自己の社会的価値（つながりのある社会との関わりで自己のよさを感じ取ることは、いかにして達成されるのか。そして、自己のよさを感じ取れる二者間の関係のあり方とは具体的にどういった関係であるのか。これらの問いが、現代における対人関係の親密さ、およびそうした関係をいかに維持するかについての理解には欠かせない。Leary (2002) の指摘するように、自己のよりよい理解は、他者との関係改善に際しても重要な道筋を示してくれることになる。

ここでは、まず、親密な二者関係を形成する基本である自己そのものの特質について考察し、自他相互の結びつきに関わる基本的な社会心理学的要因を探ることとする。ここで考察する親密な関係とは、親子やきょうだい、夫婦などの家族関係、友人や仲間、恋人関係などを想定している。もちろん、こうした関係が即、親密な関係と言えるわけではない。むしろ、状況によって、かえって深刻な問題を生ぜしめることもある。つまり、親密なそして心理的に近い他者との間であるがゆえに葛藤が生じることになる。心理的に近い他者との間にはそれだけ関係の危うさ、複雑さも存することになる。そうした親密さと背中合わせの問題こそが、自己という存在の特質を示している。

しかし、本稿は、対人関係の親密さ、関係性の問題を、特定の親密な関係にだけ限定して最終的に結論づけようとしているわけではない。自他関係のあり方については、親密な関係だけでなく、職場や組織などの上司・部下関係や同僚関係など、よりフォーマルな組織内の人間関係についても暗黙のうちに視野に入れている。ここで直接論じることができないにせよ、さまざまな対人関係に本質的につながるものを探ることが求められている。なぜなら、これらいずれの関係においても、固有の個と個の結びつきの問題であることに変わりはないからである。

2. 対人関係の親密さと自己

自己とは何かは、古くて新しい問題である。自己が何を志向し、他者とのように関わりあう存在であるかは、人間の社会行動を理解する上で重要な鍵

となる。人は、自己（の社会的価値）を首肯しうる形で物事を認知し、他者と関わり、集団や組織に所属しようとする。自己のよさが感じ取りにくい状況は、個人にとって好ましいものではない。そのため、人は、自己自身あるいは状況そのものを変えようとする。もちろん、好ましくない状況を回避することもある。

人が、誰とどのように関わり、どういった集団や組織に所属しようとするかは、まさにその人がどういった存在であるかを示している。「朱に交われば赤くなる」や「つきあっている友人を見ればその人がわかる」という言葉は、自己のありようが他者との関わりによって規定されることを端的に示している。また、その人の自己のありようは、関わり合う他者の中に示されているのである。

自己のよさや、自己肯定への希求は、自己の所属する集団へと及び、自己の所属する集団を肯定しようとして、内集団ひいきを生み出すことにもなる（例えば Hogg & Abrams, 1988 など）。また、神・山岸・清成（1996）は、内集団を外集団よりも好意的に知覚することを内集団評価、内集団を外集団よりも実際に優遇する行為を内集団ひいきと規定し、内集団ひいきには、自己と内集団成員との双方向依存性が必要であるとしている。つまり、内集団ひいきをするのは、ひいきを行う自己もそのことによって利益を増加させることができるからであり、その意味で自己と内集団成員が相互に依存しているのである。

自己と親密な関係にある他者とは、互いに内集団を形成しているもの同士と考えることもできる。内集団成員をひいきするのは、とりもなおさず自己の利益になるからであるとする考え方は、親密な関係にある二者についても、同様に双方向的な視点でものを見ることの重要性を示唆している。ともすれば、対人関係の問題は、集団の問題とは切り離して捉えられがちである。しかし、人間相互の関係およびその維持という観点からみると、かなり共通した見方ができるように思われる。

さて、自己は、こうした自己肯定への希求をもとにした、柔軟で全体としてバランスを保とうとするひとつの力動的システムであると考えることができ

る。後に見るように、全体としての自己を肯定すべく、自己肯定に関わるさまざまな要素を状況に応じて力動的に変化させているのである（例えば Tesser, 1988 など）。さらに、自己は、自己内のバランスを保とうとするだけの閉じた存在ではない。自己は、友人や恋人、きょうだいや家族など、親密な他者との間では、自己と同時に自己と関わる他者の双方にとって心地よい状態を作り出そうとする存在でもある。

自己は、本来、自己と関わる他者の存在によって、自己たりえている。Beach & Tesser (1995) が指摘するように、もし、自己にとって親密な関係にある他者が自己肯定しえない状況にあるとすれば、そうした他者と親密な関係にある自己も共感的に反応し、時として苦悩することもある。そうした状況においては、自己の肯定も十分なものではなくなる。自己と親密な関係にある他者の自己肯定が阻害されていると、そうした他者との関係そのものに影響が生じてくる。

いずれにせよ、人は単に自己の肯定を希求するだけでなく、自己と関わる親密な他者をも肯定しようとし、その他者が自己肯定しうるような働きかけをしようとする。つまり、自他双方にとって、好ましい状況を作り出すことが、真の意味での自己肯定につながると思われる。このように、自己は、自己肯定と同時に自己と関わる他者の双方を肯定しようとする志向性をもった存在であるといえる。以下にこうした自己に関する研究を取り上げ、対人関係の親密さの問題を自己の視点から再検討してみることにする。

3. 自己システムとその力動性

ここでは、すでに述べたような自己の特質に関するいくつかの理論やモデルを取り上げ、その相互の関連から、親密な二者関係を規定する自己のあり方と自己の力動性について検討を行う。

(1) 社会的比較過程理論と認知的不協和理論

Festinger (1954) は、社会的比較過程理論 (theory of social comparison processes) において、

環境を理解し、環境に有効な働きかけを行うために必要な人間の基本的動因として、自己評価への動因をあげている。そして、正確な自己評価を行うため、類似した他者との比較がなされるとしている。環境へのよりよい適応が自己肯定へとつながることはいうまでもない。

社会的比較は、基本的に決定前現象であり (Jones & Regan, 1974; 磯崎, 1981), 変更が不可能で、かつ重要な決定を行う際は、自己高揚よりも他者との比較による正確な自己評価への欲求が相対的に強まる。この場合、たとえ自己を脅かす可能性のある情報であっても、その後の行動の適切性を知るために、人はあえて比較情報への接触を試みるのである。

このことは、Festinger (1957) の認知的不協和理論からも説明できる。認知的不協和理論によれば、人は、重要な決定を行う前において、できるだけ偏りのない情報接触を行うとしている。決定前では、たとえ自己にとって不都合な情報であっても、接触を回避せず、より妥当な決定を行うために、可能な限り多くの情報を求めようとする。その方が、結果としてより適切な行動を生み出すことになる。また、決定に伴って生じる不協和を低減しやすい。逆に、決定後においては、相対的に比較情報の魅力度は低下する。したがって、社会的比較が基本的に決定前現象であることは、認知的不協和理論とも整合し、いずれも自己肯定への希求という視点から捉えることができる。

ところで、能力の社会的比較は、時として競争を生み出すことがある。課題を遂行し、そこでの出来不出来、成功や失敗が、自己の位置づけや適性の把握に影響を与える。競争は、競争に関わる双方にさまざまなネガティブ影響をもたらし、問題も多い。しかし、適切な自己特性の把握とそれに基づく自己肯定への希求や模索にとって、競争が貴重な情報を提供することもある。

その意味で、学校教育をはじめとした子どもへの働きかけにおいて、競争を避け、形式的な結果の平等にこだわると子ども自身の適切な自己理解を妨げることにもなる。過度の競争は論外だが、競争をすべて悪として退ければ、かえって子どものやる気は

そがれることにもなる。

また、単一時点ではなく、ある時間的な広がりの中で自己を肯定しうるかどうかの方がより重要となる。自己は他者とどこが違う、何ができ何ができないか、何に向いているか。これらの認知は、自分なりのよさと不可分であり、自己と自己を取り巻く他者との適切な比較によって初めて可能となる。そのためには、自己を把握する適切な機会が十分に提供されていなければならない。

個性とは、そうした自他の違いを感じ取る中で培われていく。また、他者を見る目も、そうした中で培われる。人には向き、不向きがあることを理解することも、自己の冷静な把握につながる。こうした自己を理解する機会が十分でなければ、自己のよさを知ることも難しく、結果として自己の希薄化、脆弱化を招く恐れがある。自己のよさは、表面的な同一意識の形成によって達成されるのではない。適切な自他の理解に欠けた肥大化した自己 (自己愛) も同様に脆いものとなる。

(2) 自己評価維持モデルと認知的不協和理論

Tesser (1984) は、自己評価維持 (self-evaluation maintenance: SEM) モデルを提唱し、自己評価維持の視点から対人関係の問題に鋭い洞察を与えている (磯崎, 1998 参照)。SEM モデルでは、自己評価の上昇と低下を導く 2 つの過程 (反映過程と比較過程) が仮定されている。反映過程とは、自己にとって心理的に近い他者 (Heider, 1958 のユニット関係にある他者を指す。親しい他者であるとは限らない) の優れた遂行によって、個人の自己評価が上昇する過程であり、比較過程とは、心理的に近い他者の優れた遂行によって自己評価が低下する過程である。これらの過程は、当該遂行領域の自己にとっての関与度によって規定され、関与度が低いとき反映過程が、関与度が高いとき比較過程が生起するという。

比較過程の生起を避け、反映過程が生起することが自己評価の維持、自己のよさにつながる。自己評価が維持できないとき、関与度、他者との心理的な近さ、遂行を変えることによって自己評価を維持しようとすると考えられる。その意味で、自己は力動

的である(磯崎・高橋, 1993)。

SEM モデルは、好意や嫉妬・羨望などのさまざまな対人感情やライバル意識などをうまく説明できる。ライバル意識(行動)は、心理的に近い相手と、相互に高い関与度の領域において、お互い強く意識し合い、遂行を競い合うことを指す。また嫉妬・羨望などの感情は、ここでいう比較過程の生起と密接に結びついている。自己評価が維持できる対他者関係は、個人にとって好ましく、そうした他者に魅力を感じるようになる。

自己評価維持の概念は、認知的不協和理論における不協和の概念と類似した側面を持っている。不協和の生起は、自己評価の維持が阻害された場合と同様、自己を脅かしネガティブな感情を生起させる。しかし、不協和が生起し自己が脅かされた場合でも、他の手段によって自己肯定が可能ならば、不協和を低減しようとする傾向(例えば態度変化など)はあまり見られなくなる(Steele & Liu, 1983)。

また、Tesser & Cornell (1991) は、ある種の自己評価維持状況が、不協和低減の代わりとなることを明らかにしている。ここでは、関与度の高いことから比較を回避できている(自己評価が維持されている)状況では、比較を回避できない(自己評価維持がなされていない)状況に比べ、不協和を解消しようとする傾向(態度変化)は小さかったのである。さらに、Tesser, Crepaz, Collins, Cornell & Beach (2000) の研究では、不協和の大きさが自己評価維持に影響を与えることが示されている。つまり、反映過程が生起している場合、不協和が大きい人は、不協和の小さい人よりも、他者との心理的な近さを増大させていた。不協和が大きいほど自己評価維持への志向が強くなることになる。また、比較過程が生起している場合、不協和の大きい人は、不協和の小さい人よりも、有意ではないが、他者との心理的な近さを減少させていた。

これらは、不協和と自己評価維持という質的に異なる過程が、自己という一つのシステムにおいて、相互に密接に関連しあって全体として自己を保つ働きを示唆している。不協和が生起しても、自己評価が維持されていれば、不協和を解消しようとする傾向は低下する。これは、自己評価維持その

ものによって、自己がすでにあるレベルに保たれているため、不協和が生起しても自己をそれほど脅かさないと示している。自己評価が維持されていれば、不協和そのものをあまり感じないですむのかもしれない。また、不協和の大きさによって、自己評価維持機制に変化が見られ、不協和が大きいほど、自己評価維持傾向も強まる。このように、不協和の解消と自己評価維持が、相補的に作用していることも、自己が力動的な一つのシステムであることを示している。

(3) 自己評価維持モデルと役割モデル

SEM モデルの仮定とは異なり、自己にとっての関与度が高くしかも他者の遂行が優れていても、自己評価が上がる場合があるという(Lockwood & Kunda, 1997; 2000)。Lockwood & Kunda (1997) は、他者の優れた遂行を自己が達成可能であると認知すれば、関与度が高くても、SEM モデルのいう比較過程は生起しないとしている。その理由として、他者の優れた遂行を自分も達成可能と認知できれば、自己にとって励ましとなり、自己評価はむしろ上がると説明される。

Lockwood & Kunda (1997) は、これを役割モデルと呼び、現時点での遂行レベルだけではなく、将来を見据えた遂行レベルを視野に入れた自己評価を問題にしている。将来的な志向性(目標)や時間的な広がりを含んでいる点は興味深い。そして、いわゆる遂行レベルではなく、学習レベルまで議論を展開している。役割モデルの考え方は、Dweck (1985) の SEM モデルは遂行を問題にするときはモデルの当てはまりがよいが、学習を問題にするときはあまり当てはまらない可能性があるという指摘と符合する。

役割モデルは、SEM モデルの不足していた点を補うものといえる。自己は、現在の遂行レベルだけでなく、将来的な学習や達成の見込みなどによっても規定される、より幅をもった力動性のある存在と言える。これは、Markus & Nurius (1986) の可能自己(possible selves)の議論とも対応する。

ただし、関与度が高くても、達成可能性が感じ取れる他者が、SEM モデルのいう心理的に近い他者

に必ずしも該当するとは限らない。社会的比較過程理論から示唆されるように、遂行レベルがあまりに異なる他者は、関与度が高いにせよ、比較の対象になりにくいからである。その場合、そうした他者は心理的に近い他者とはなりえず、したがって、SEM モデルの比較過程は生起しないと考えることもできる。

4. 対人関係の親密さと自他のバランス

ここでは、対人関係の親密さという視点から、SEM モデルに示される自己評価維持の考え方の問題点とそれを修正した Beach & Tesser (1995) の拡張 SEM モデルを取り上げる。また、具体例をあげながら、対人関係における自己と親密な他者双方のバランスの重要性について考察を進めることにする。

(1) SEM モデルと拡張 SEM モデル

自己評価維持や不協和の低減が、自己肯定とむすびつくことはすでに見たとおりである。では、自己および自己と関わる他者の双方の視点から、自己評価維持や不協和を取り上げたらどうなるだろうか。SEM モデルは、自己評価維持が自己肯定をもたらし、自己と心理的に近い他者の関係を安定したものにしている。ただし、これは、自己の視点からのみ見た場合であり、自他相互の視点に立ったものではない。

Beach & Tesser (1995) の指摘するように、ある個人 A の自己評価が維持されていたとしても、自己と心理的に近い他者 B の自己評価が維持されているとは限らない。A の自己評価が維持されていても、A と親密な関係にあるもう一方の主体である B の自己評価が維持されない場合、B は自己肯定しえない状況にある。つまり、自己評価が維持できている A にとって好ましい B との関係も、B にとっては耐え難いものとなる可能性がある。また、A にとっても、一方的な自己評価維持を心から喜ぶことは難しい (Beach & Tesser, 1995)。

このように、B と親密な関係にある A の側にも影響を与える。この場合、B は関与度や遂行を変化さ

せて自己評価を維持しようと試みたり、A との関係そのものを換えようとするかもしれない。いずれにせよ、こうした自他関係にある状況の魅力性は低下しがちであり、A と B との関係は不安定なものになる。逆に、自らの遂行結果として、パートナーが反映過程によってポジティブな感情を抱くことができれば、自己の感情的反応もよりポジティブなものとなり、状況の魅力性も高まることになる。

つまり、自己と心理的に近い他者の双方が、自己評価維持できるかどうか、親密な二者間において重要な問題となる。不協和理論の観点から見ると、自己および心理的に近い他者の一方だけが自己評価維持でき、他方が自己評価維持できない状況は、二者間のバランスが崩れた不協和状況にあると考えられる。自己と心理的に近い他者との関係が親密なほど、不協和も大きくなる。自己評価維持は、まさにそうした親密な他者の存在によってこそ成り立っている。そうした他者の自己評価維持を阻害していることは苦痛でさえあると言えるかもしれない。

このように、親密な関係にある者同士は、自らの結果において自己評価が維持されているかだけでなく、パートナーの自己評価が維持されているかどうかについても敏感であり、共感的に反応すると考えられる。したがって、SEM モデルによる自己評価維持だけでは、二者の関係が安定し維持されるとは限らないのである。親密な他者と自己の双方が自己評価維持できていることが、真の意味での自己評価維持につながり、その関係も安定したものとなる。このように、SEM モデルを、二者関係の自己と他者双方における自己評価維持まで拡張したのが、Beach & Tesser (1995) による拡張 SEM モデルである。

拡張 SEM モデルによれば、自己が比較過程を回避でき、反映過程による恩恵を受けたとしても、パートナーに比較過程が生起したり、反映過程の恩恵が感じられないことによってパートナーに苦しみが生じていれば、自己も素直には喜べないのである。その代わりに、自己が比較過程を回避できることによって、パートナーに反映過程が生起すると、自己の喜びは倍増する。

したがって、自己規定の領域が重なる自己と心理

的に近い他者双方の自己評価が維持されるには、自己規定を調節したり（関与度の変化）、一緒に行動し成果を共有する（協同で結果を出す）ことによって比較過程が起きないようにすればよい。また、同一の自己規定領域を微妙に異なる下位領域に分け、棲み分けを図るという手だてもある。一方の優れた遂行が、他方に反映過程による恩恵をもたらせば、互いに喜びを共有できることになる（Beach & Tesser, 1995）。

(2) 拡張 SEM モデルによる親密な二者関係の例

直木賞作家の小池真理子氏が、同業の作家であり夫である藤田宜永氏との間で経験した「試練」は、自己評価維持と親密さの問題を端的に物語っている（小池, 2001）。以下は、小池氏自身の回想（小池, 2001）を引用し、まとめたものである。

1980年に知り合った二人は、1984年から一緒に暮らし始めた。小池氏にとって、「書く」という行為は、「何ものにも心乱されない」、「満ち足りたひととき」だった。1996年、自分の作品が思ってもみなかった直木賞候補となる。同時候補の中に藤田氏の作品もあった。二人同時に受賞することは考えられない。小池氏は、そのとき、驚くべきことに「二人とも落選すればいい」と願ったという（SEMモデルの視点からは極めて自然な願いであった）。結果は、その願いに反し、小池氏のみが直木賞を受賞することになる。

「あれは辛い日々であった。ぶつけどころのない辛さだった。—彼の悲しみと落胆が理解できる分だけ、そっくりその悲しみが私に向かって跳ね返ってきた。」「一時的に別居してもいいのよ、と言ったこともある。おめでとうの嵐に囲まれ、お祝いの花や贈り物に囲まれ、かかってくる電話に『ありがとう』と答え、十倍にもふくれあがった仕事の依頼に應對している私と共に生活していかざるを得ない彼のことを、とてもみていられなくなったせいだ。」

「私が別の職業についていたり、あるいは主婦だったりすれば、何の関係もなかった。ああ、落ちちゃったのね。また頑張りなさいよ—で終わっ

ていた。彼は彼で、とても気楽に私に向かって愚痴を言うことができただろうし、第一、受賞した人間の生活をまのあたりにしなくても済んだ。」

それだけに、その5年後、夫が直木賞を受賞できたとき、「手放しで嬉しかった」という。「ものかき同士であったことを恨み、後悔しつつも、ものかき同士だからこそ培ってきた絆の強さを信じた」とも。

ここには、拡張 SEM モデルの言う、自己の達成によって生じたパートナーの苦しみと、その苦しみを共有する自己、それによって生じる二者間のひずみが見事なまでに描かれている。パートナーが作家でなければ、小池氏の受賞は、夫婦に素直な喜びをもたらしたであろう。5年後のパートナーの受賞を「手放しで嬉しかった」と記しているのは、拡張 SEM モデルから容易に説明がつく。つまり、ここで初めて相互の自己評価維持が可能となったのである。そしてそのことへの素直な喜びと解釈できる。小池氏は、ここにいたって初めて「自分が5年前に受賞したことの本当の喜びを、一人ひそかに味わい始めている」という。

歌集『みだれ髪』の成功によって名声を得た与謝野晶子が、晶子の名声がゆえに苦しむ鉄幹の姿に心を痛めたのも、拡張 SEM モデルの視点から同様に理解できよう。

また、磯崎（2002）は、大学生を対象にしたきょうだい関係の研究において、対象者129名のうち33%が、関与度を調整するなどしてきょうだいと棲み分けを行ったことを報告している。そして、結果としてその多くが、現在良好な関係にあるという。また、親が子どもに対し、きょうだい間に軋轢が生じないように関与度の調整を働きかけたという例も見られている。なお、対象者の37%が、きょうだい間でライバル心を感じていたこと、特に年下のきょうだいに対してそれが顕著であった。

5. 人間存在の基本様式と対人関係の親密さ

(1) 「ある様式」と「持つ様式」

Fromm（1976）は、人間存在の基本様式として、「持つ様式」と「ある様式」を区別している。「持つ

様式」は、所有する傾向であって、持つことを自己の価値、同一性、存在のあかしとする生存への欲求という生物学的要因に根ざしている。これに対し、「ある様式」は、何ものにも執着せず、変化を恐れず、たえず成長する傾向、分かち合い、与え、犠牲を払う傾向であって、他人と一体化して孤立を克服しようとする生来の要求に根ざしている。

また、天野(2001)は、団塊世代論の視点から、従来団塊世代論の多くが、経済第一主義の支配的価値のもとで、彼らが「何を獲得したか」という「持つ様式」のみを議論の対象とし、「どのような関係を育てたか」の「関係を築く様式」を議論の対象からはずしてきたと指摘している。「関係を築く様式」は、Frommの言う「ある様式」に当たる。

自己と(親密な)他者の問題を考えるには、この「持つ様式」と「ある様式」の議論を避けることができない。「持つ様式」の個人間の関係における基本的要素は、競争、敵意、恐れである。「ある様式」においては、楽しみや悲しみを分かち合い、この分かち合いが二人の個人の関係に生命を与え、その生命を維持させる。Frommは、あることは同時になること、変化することであり、変化と成長は、生命に内在する特質であるとしている。

自己評価維持における比較過程の回避は、「持つ様式」と結びつき、反映過程は、「ある様式」と結びつく側面がある。しかし、すでにみたように、SEMモデルにおける自己評価維持では、関係する二者の双方を活かし、その関係に生命を与えるとは限らない。むしろ、「持つ様式」が強まりがちである。そこでの関係は、自己評価維持が一方的なものである限り不安定さを内包し、葛藤をもたらすものとなる。そのため、思わぬ離反や孤立の恐れから逃れにくい。

自己評価維持を双方向的な視点からとらえた拡張SEMモデルは、この問題を解消しようとしたものであり、Frommの「ある様式」に近づいたものとなっている。「ある様式」とは、生来の要求にねざしてはいるものの、固定したものではなく、能動的であり、二者間の力動的な関わり合いの過程でもある。

(2) 対人関係の親密さと「ある様式」としての自己のあり方

これまで、SEMモデルと拡張SEMモデルの視点から、自己と他者における「近さ」の問題、近さゆえの葛藤を論じた。また、人間存在の基本様式としての「持つ様式」、「ある様式」と両モデルの関わりについて検討した。

親密な二者関係においては、拡張SEMの考え方は示唆に富んでいる。しかし、自他双方の視点を考慮しているにせよ、拡張SEMモデルも、自己評価維持という視点からのみ自己を捉えている点はSEMモデルと変わらない。問題なのは、親密な二者間で、相互に自己評価を維持することは、どの程度可能かである。

自己を規定する領域が何であるか、二者間に明示されているとは限らない。また、自己規定的な領域は、遂行の変化や時間の経過と共に変わりうる。自己は、ある一つの力動的なシステムである。すでに見たように、不協和が生じたり自己評価維持が阻害されても、それとは異なる他の側面で全体として自己を保つことができれば、それほど大きな問題ではない。

将来的な達成可能性があれば、自己評価維持を志向しないとするLockwood & Kunda(1997)の役割モデルは、そうした考えを支持している。また、ある特定の領域で、自己評価維持がなされれば、それ以外の領域では、自己評価維持を度外視する(関与度の高い領域で、心理的に近い他者を自己より高く評価する)という結果も報告されている(磯崎, 1994)。

これらは、人は、自己評価維持を志向するだけの存在ではないこと、そして自己と他者の双方にとって好ましい状況を作り出そうとする志向性(関係性維持)をも併存させていることを示唆している。

関係性維持を志向する自己のあり方は、Fromm(1976)の「ある様式」につながる。対人関係における親密さの形成とその維持には、自己評価維持だけでなく、関係性維持の双方が必要となる。Fromm(1976)の言う「持つ様式」から「ある様式」へのシフトも重要な課題となる。

引用文献

- 天野正子(編)(2001). 団塊世代・新論 <関係の自立>をひらく. 有信堂.
- Beach, S.R.H., & Tesser, A. (1995). Self-esteem and the extended self-evaluation maintenance model: The self in social context. In M.H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum Press. pp.145-170.
- 大坊郁夫(1997). 魅力の心理学. ポーラ文化研究所.
- Dweck, C.S.(1985). Intrinsic motivation, perceived control, and self-evaluation maintenance: An achievement goal analysis. In C. Ames & R. Ames (Eds.), *Research on motivation in education*. Vol.2. *The classroom milieu*. New York: Academic Press. pp.289-305.
- Festinger, L (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Festinger, L (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Stanford: Stanford University Press. (末永俊郎監訳 1965 認知的不協和の理論 誠信書房)
- Fromm, E. (1976). *To have or to be?* New York: Harper & Row. (佐野哲郎訳 1977 生きるということ 紀伊国屋書店)
- 浜 治世・浅井 泉(1993). メーキャップの臨床心理学への応用. 資生堂ビューティサイエンス研究所(編). *化粧心理学*. pp.346-358.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- Hogg, M., & Abrams, D (1988). *Social identifications: A social psychology of inter-group relations and group processes*. London: Routledge. (吉森 護・野村泰代訳 1995 社会的アイデンティティ理論: 新しい社会心理学体系化のための一般化 北大路書房)
- 神 信人・山岸俊男・清成透子(1996). 双方向依存性と最小条件集団パラダイム. *心理学研究*, **67**, 77-85.
- Jones, S.C., & Regan, D.T. (1974). Ability evaluation through social comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, **10**, 133-146.
- 磯崎三喜年(1981). 能力評価の社会的比較に関する実験的研究. *実験社会心理学研究*, **20**, 119-125.
- 磯崎三喜年(1994). 児童・生徒の自己評価維持機制的発達的变化と抑うつとの関連について. *心理学研究*, **65**, 130-137.
- 磯崎三喜年(1998). 社会的比較と自己評価の維持. 安藤清志・押見輝男(編). *自己の社会心理*. 誠信書房. pp.97-116.
- 磯崎三喜年(2002). 兄弟関係における自己評価維持機制的研究 第9回日本子ども社会学会抄録集, p.38.
- 磯崎三喜年・高橋 超(1993). 友人選択と学業成績の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 *心理学研究*, **63**, 371-378.
- 小池真理子(2001). 「夫婦で直木賞」かくも長き五年. *文芸春秋*9月号, 文芸春秋. pp.142-148.
- Leary, M.R. (2002). When selves collide: The nature of the self and the dynamics of interpersonal relationships. In A. Tesser, D.A. Stapel, & J.V. Wood (Eds.), *Self and motivation: Emerging psychological perspectives*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.119-145.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1997). Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 91-103.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (2000). Outstanding role models: Do they inspire or demoralize us? In A. Tesser, R.B. Felson, & J.W. Suls (Eds), *Psychological perspectives on self and identity*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.147-171.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, **41**, 954-969.
- 松井 豊(1993). 恋ごころの科学. サイエンス社.
- Murstein, B.I. (1977). The stimulus-value-role (SVR) theory of dyadic relationships. In S. Duck (Ed.), *Theory and practice in interpersonal attraction*. Academic Press.
- 小野寺孝義(1989). 美人タイプと美人ステレオタイプに関する研究. *東海女子短期大学紀要*, **15**, 113-122.
- Steele, C.M., & Liu, T.J. (1983). Dissonance processes as self-affirmation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 5-19.
- Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and development. In J.C. Masters & K. Yarkin-Levin (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York: Academic Press. pp.271-299.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. **21**, New York: Academic Press. 181-227.
- Tesser, A., & Cornell, D.P. (1991). On the confluence of self-processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **27**, 501-526.
- Tesser, A., Crepez, N., Collins, J.C., Cornell, D., & Beach, S.R.H. (2000). Confluence of self-esteem regulation mechanisms: On integrating the self-zoo. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1476-1489.